

「多い」をめぐる制約

—その構造と学習者の使用から—

西内沙恵（立教大学・国立国語研究所）

Condition of the Japanese Adjective “Ooi” : From the viewpoint of the structures and the use of learners

Sae NISHIUCHI (Rikkyo University and)

キーワード： 「多い」、連体修飾節、二重主語構文、比較構文、学習者コーパス

Keywords : “Ooi” , noun-modifying clause, double subject sentence structure,
comparison sentence structure, learner corpus

SUMMARY

In this paper, we treat the special usage of the Japanese adjective “Ooi” that expresses the degree of amount. Previous studies have pointed out that “Ooi” is not ahead of the noun in spite of being the adjective, but why this is the case remains unsolved. Therefore we will organize them and observe actual use in the learner corpus I-JAS. Furthermore we will suggest several educational proposals throughout analyzing the use of learners.

1. はじめに

日本語の数量の程度を表す形容詞「多い」では、連体用法を用いることができない。対して、英語やスペイン語など、そのほかの言語で同じ意味を表す場合、連体用法で表現できる。

- (1) a. many friends
- b. muchos amigos
- c. *多い友達
- d. たくさんの友達

この制約については、西尾（1987⁶）、寺村（1993）、森山（2003）、山田（2004）でとりあげられ、その構造が指摘されてきた。また、度会（2015）は7種の教科書の分析から、「多い」と「少ない」の用法の制限についての補助的な指導が、教育現場で必

要なことに言及している。本稿では、従来の「多い」の分析と、度会（2015）でとりあげられた比較表現のもとでの「多い」の使われ方との関係を再考する。すなわち、二重主語構文と比較構文における「多い」の被修飾名詞の性質と、用法の違いについて整理する。その上で、日本語学習者コーパス I-JAS を用いて実際の学習者の誤用を観察した上で、該当項目の導入において重要な点を提言する。

2. 先行研究

2.1 寺村（1993）にみる形容詞の名詞修飾

『寺村秀夫論文集』の言語学編にまとめられる、「対照言語学と日本語研究」の章につぐ「名詞修飾部の比較」においては、「名詞修飾」の定義を次のようにしている。名詞修飾は、「内心構造の、その名詞（＝主名詞）に付随している形式」である（寺村, 1993, p. 141）。「内心構造」はブルームフィールドの用語で、名詞を中心とし、その全体で名詞として文中で機能するものである。

対照研究にあたっては、「修飾」という文法用語の使用範囲に気を使わなければならないことを、英語と日本語を例¹に述べている。そして、形容詞は名詞の修飾部にも文の述語にもなる点から、述語にならない限定詞と述語の中心となる動詞との中間にあるとしている²。また文法的及び意味的に問題になることを論じるにあたり、イエスペルセンの“nexus”（The flower is red. のような構文）と“junction”（The red flower のような構文）の用語に、日本語の構文論にとっても重要な対立概念と考えた佐久間（1957）が当てた訳である「述定」と「装定」を用いて以下のように論じている（寺村, 1993, p. 152）。

装定を述定から転じたものとして説明すること - それは初期の変形文法による形容詞の分析にもみられたことである - それ自体は誤りとはいえないが、構文論としても意味論としても安易に過ぎることが、次第に明らかになってきている。

（寺村, 1993, pp. 152-153）

英語の形容詞の中でも装定としては使われるが述定には使えないものや、反対に述定にのみ使われるものがある点を、Bolinger（1967）の指摘をあげながら論述している。なお、この議論が日本語の形容詞について考えるときにどの程度参考になるかは分からないとしながらも、日本語にも装定には使うが、述定には使うことができない修飾語として「トンダ」「大シタ」を例にあげている（寺村, 1993, p. 146）。その反対に、装定に使うのが難しい形容詞が少数あるとして、「多イ」と「少ナイ」をとりあげている。下はその例である。以降、出典の明示がない例文は筆者による作例である。

- (2) a. 今日ハ客ガ多イ。
b. *今日ハ多イ客ガ来テイル。
- (3) a. UFO ヲ目撃シタ人ハ少ナイ。
b. *少ナイ人ガ UFO ヲ目撃シタ。

- (4) a. 髪ノ毛ガ多イ人。
b. コノ辺デ（一番）多イ事故ハ…。

(寺村, 1993, pp. 153-154)

(2) (3) の例について、この制限が英語の “many” “few” “no” , さらに数詞などの使い方の制約と逆に見え、制限的用法と非制限的用法の検討も必要であるとした上で、これ以上の議論には及んでいない。なお、(2), (3) 及び (4a) の例から、連体用法が非文となること、また主格を有する名詞修飾文であれば容認させることが分かる。なお、(4b) のように比較表現が共存する意味での「多い」の使われ方については次章で詳しく扱うが、この例文は連体用法だが容認可能な点で疑問提起的であるといえよう。

2.2 山田 (2004) にみる基本的な使われ方

山田 (2004) では、国語の学校文法³の枠組みを残しながら、時代に合わせて変わってきた目的や研究が進み明らかになった新事実を平易に、現代の言語活動に役立つように基本的な事項でもって解説するものである。「連用修飾・連体修飾」を扱う章の節「形容詞の連体用法の特例」で、「×多い人が来た」と言えないのはどうして? (山田 2004, 74) というテーマをあらかじめ提示した上で、「多い」だけでなく「少ない」「遠い」「近い」を、連体用法で「い」の形をとらないものとして、次のようにまとめている。

これらの形容詞は「×近いスーパーに買い物に行く」や「×多い人がやってきた」とは言えません。かわりに「近くの」「多くの」を用います。「遠い」も同じく「遠くの」になりますが、「少ない」は少し形を変えて「少しの」を使います。

しかしまったく「近い」などが名詞修飾で使えないかということそうではありません。「家が近い人は忘れ物をしてもすぐに取りに帰れる」や「残業の多い夫は過労死が心配だ」のようにそのまま使うこともできます。この場合、形容詞の前に必ず「名詞+格助詞」があり、名詞修飾節の述語となっています。

(山田, 2004, p. 78)

寺村 (1993) では、「多い」「少ない」を連体用法で用いられず、叙述用法でしか使われない形容詞としてあげていたが、山田 (2004) はその仲間として「近い」「遠い」をあげている。また、これらの形容詞が単独で名詞を修飾する際に連体形の代用を必要とする点、名詞修飾節をなす場合には名詞を修飾することが可能になる点を明示している。

2.3 西尾 (1987⁶) にみる「多い」の周辺

西尾 (1987⁶) では西尾が収集した用例をもとにした形容詞の分析をまとめた一冊であり、網羅的に形容詞をとりあげ、かつ鋭い記述がなされている。

「多い」も扱われており、数量に関する意味分野に属し、かつ数量の程度が大きいことを表す「多い」「たくさん」「おびただしい」を同じグループに属するものとして、これらがどのように使い分けられているかを観察している。「多い」が連体形で用

いられず、「多くの」及び「たくさんの」が使われるとしている。また、山田（2004）同様、(5)のように名詞修飾節の中の述語であれば連体用法が現れる点に触れている。さらに、連用用法においては「たくさん（に）」が優勢であるものの、「多く」も用いられるとしている。本節で出典の明記がある例は、西尾（1987⁶）に掲載されたものである。

(5) K 子は嘉門と関係の多い課に入ってきたのだが、K 子の方でも、なぜか彼に親しうにしてくれたので、ときどき話をするようになった。

（冬の宿, p. 116~117）

- (6) a. 多くの学校で取り入れられている方式
 b. たくさんの学校で取り入れられている方式
 c. ?多くの水を飲んだ。
 d. たくさんの水を飲んだ。
 e. 多くの水を飲ませられた模様です。

なお、西尾（1987⁶）では論じられていないが、「多くの」と「たくさんの」では、わずかに意味が違う。すなわち、「多くの」が対象のうち大きな割合を占めているという読みになるのに対して、「たくさんの」はただ数が多いということを示す。割合が大きいということは数が多いということと矛盾しないため、(6a) (6b) のように、類似の文で使うことが可能である。しかし、「水」のように割合が不確かな対象には「多くの」は、用いられにくい。なお、(6e) のように、情報番組のナレーターを思わせる例では、容認度が上がらないだろうか。本稿ではこれ以上の分析をしないが、「多くの」と「たくさんの」の使われ方に差異がある点を押さえておきたい。

西尾（1987⁶）に立ち戻る。それぞれの語の実質的な内容として「おびただしい」が「おおい」の程度が非常に大きい部分のみと対応する（図1）。また、「おびただしい」は数量が異常に多いという条件のもとで使われることから、(7) のように驚きや衝撃的な感情がしばしば起こることも見出している。さらに、(8) のように狭い意味での数量に関する意味の分野から抜け出し、程度表現に転化しているために、「多い」とのおきかえが不可能な点にも触れている。

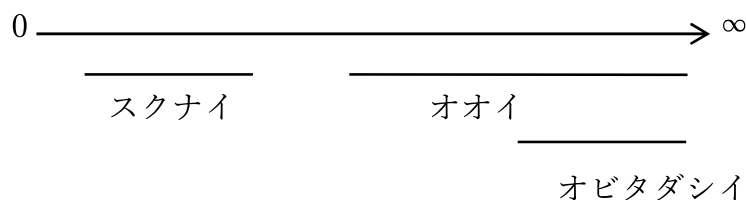


図1 「おおい」と「おびただしい」の意味の相違

(7) 其の答より何より，姉は時雄の着物に夥しく泥の着いて居るのに驚いて，「まア，何うしたんです，時雄さん。」

(蒲団, p. 31)

(8) 「全速力で進行して居る中に，凄じい音がしたと思ひましたけえ，汽車が夥しく傾斜してだらだらと逆行しましてナ，何事かと思ひました。」

(蒲団, p. 62)

ほか，文体の観点から「おびただしい」は文章語的であるという点で，「多い」及び「たくさん」と区別している。また，「多い」と「たくさん」の間でも「たくさん」の方がより口語的であるという傾向の違いがあることを説明している。

2.4 森田(1989)にみる対義的な用いられ方

森田(1989)は，意味の領域が広い基礎語彙の本義から転義，比喩的な意味の用法，さらに対義関係にある語や関連語の意味と用法のずれを著し，その微妙な使い分けと意味の分担を詳しく扱う辞典である。さらに意味の面のみならず，扱う語がとる主体や対象に着目し，その用法と関連づけて文中の働きを分析している点で，語義の分類を旨とする多くの国語辞典と異なる。この辞典の特性から，「多い」の項目で，対義関係にある「少ない」にも触れている。

森田(1989)では，「多い」の基本的な意味を「物事の数量が標準や筆画の対象を上回る状態。」とし，数量の程度は「多い」と「少ない」で表し得，多くの場合は入れ替えが可能だが，(9)のような慣用句は入れ替えられない点を指摘している。また，「男」と「女」，「成功」と「失敗」のように対応概念をなす場合や，(10)のような比較表現の場合，「多い」は他方を数量的に上回ることを意味し，絶対的な数の多さを含意しない。なお，比較表現の例をあげているが，「多い」が表す意味の範囲を明らかにするためにあげているのであり，ここで用法の分析話されていない。この点が「たくさん」「大勢」「豊富」「おびただしい」などと異なるとしている。この記述は西尾(1987⁶)の記述と矛盾せず，より多くの「多い」の周辺語を拾っている。関連語として紹介する「たくさん」「大勢」「豊か」「おびただしい」を図2の「たくさん」の部分に該当する表現として，(11b)から(11e)のように修飾を分担する名詞別に，対応する対義関係の語がある場合はそれも示している。(11c)のように人に関しては，「たくさん」も用いられるが，「大勢」の方が好ましいとしている。さらに，「豊か」「豊富」にはプラス評価の気持ちが伴うとしている。ほか，西尾(1987⁶)でも触れられていたことだが，「汚いことおびただしい」「おびただしい寒さ」のような程度を表す表現は「多い」や「たくさん」と置き換えられない点にも言及している。

(9) 気が多い

(10) 地球より火星のほうが衛星が多い

(11) a. 「多い」 ↔ 「少ない」

b. 頻度や数えられる名詞：「たくさん」 ↔ 「わずか」

c. 人：「大勢」

- d. 物の量：「多い」「豊か」「豊富」 ←→ 「少ない」「乏しい」
 e. 多さが極端な場合：「おびただしい」

(森田, 1989, p. 218-219)

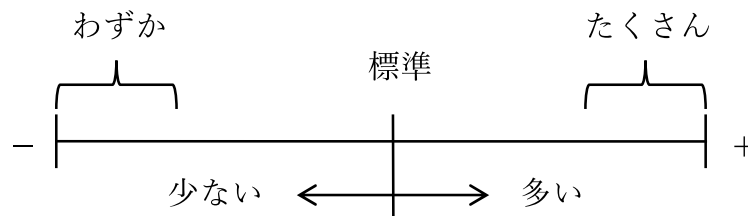


図2 「多い」と「たくさん」などの関係 (森田, 1989, p. 218)

「たくさん」の説明は「多い」を考える上でも示唆的である。(12a)が自然で、(12c)が不自然なのは、「たくさん」が数を数えた結果、その集合として数量が多いという気持ちを表すためだと説明している。すなわち、「人口」や「人々」といった対象の集合を含意する語には用いられない。ほか、「たくさん」は回数を表しえないことをあげる。(13b)は降水量を、(13a)は今年雨が降った回数を意味し、それぞれの意味は異なる。

- (12) a. 人がたくさんいる
 b. 本がたくさんある
 c. ?人口がたくさんいる
- (13) a. 今年は雨が多かった
 b. 今年は雨がたくさん降った

(森田, 1989, p. 218)

最後に、「多い」の用法に関して述べている点を見る。森田(1989)では、形式名詞との相性が高い点をあげている点が、ほかの先行研究になく、新しい。機能語として使われる形式名詞はほかの形容詞でもよく使われるように思われるが、ここでは「多い」が形式名詞であれば連体用法が自然に使われているという点に着目している。

体言に係る場合、連体形「多い……」のほかに、「多くの……」(「多く」+「の」)の形もある。「多い」は「多いときには……」「多いほうがいい」のように「とき、ばあい、うち、ほう、こと、の、はず」などの形式名詞を続ける場合によく用いられる。普通名詞が続く場合は「多くの人」「多くの国」と「多くの」が用いられる。ただし、「血の気が多い連中」「雨の多い年」のように、名詞句中の述語に立つ場合は、普通名詞に係っていても「多い……」が用いられる。

(森田, 1989, p. 219)

ここまで「多い」にまつわる事実を観察する先行研究をみてきた。ここからは、なぜ「多い」が連体用法で用いられないのかを分析的に記述する研究をみていく。

2.5 森山(2000)の分析:なぜ「多い」が連体用法で用いられないのか

森山(2000)は、様々な目的から日本語文法を学びたいと考える読者に向けた日本語文法研究の紹介書である。重要事項が網羅的に、かつコンパクトに、またわかりやすくまとめられた一冊である。形態論を扱う章の「品詞を考える」節に置かれた「用言と活用」において形容詞の活用形の独立性⁴について述べた後、変則的な事象として次のような記述がある。

形容詞の活用で興味深い変則が、「多い、少ない、遠い、近い」などの連体形である。「多い場合」「白髪が多い年代」「血の気が多い若者」のように、普通にあとに名詞をとまなう使い方もあるが、そのまま「*多い人々」のようにいうと不自然であり、「多くの人々」と言わなければならない。いずれも、ものごとが本来持っている性質とは違い、集まり方などの、いわば存在の仕方をいうような場合と言える。

(森山, 2000, p. 43)

森山があげる例では、叙述用法であっても(14a)のように不自然であるため、(14b)が不自然に感じられるのは形容詞が修飾できる名詞の関係から自然であろう。ここでは、(14c)がいえるのに対し、(14d)が不自然であり、(14e)と同じ意味で用いられない。この主旨から、形容詞が被修飾名詞の性質ではなく存在のし方を表しているという分析である。

- (14) a. *人々が多い
 b. *多い人々
 c. 人が多い
 d. *多い人
 e. たくさんの人

2.6 度会(2015)

「多い」と「少ない」の連体用法の制限に関して、任意の使用例と誤用例を前節の主な先行研究をもとに比較考察するものである。さらに、7種の教科書の分析から、教育現場で「多い」「少ない」の用法の制限についての補助的な指導が必要であると提言している。

- (15) a. Q: 京都はどうでしたか。
 b. A: きれいでした。
 c. A: *多かったです。

- d. A : *少なかったです。
- e. A : 京都はお寺が多かったです。
- f. A : 京都の高い建物が少なかったです。

(度会, 2015, p. 167)

度会 (2015) では, (15a) の質問に対して, (15b) が容認されるが (15c) と (15d) が非文となる根拠を森山 (2000) にみた被修飾名詞の属性の観点から説明する。すなわち, 「多い」が被修飾名詞の属性ではなく寡多を表す点で, ほかの形容詞とは異なることをその要因している。叙述用法では属性ではなく, 寡多も表しうる。そのため, 形容詞文の節により名詞修飾をすることで, (15e) と (15f) のように被修飾名詞の属性を表すことができるという論旨である。また, (15e) と (15f) のように二重主語構文の形式をとれば非文にならない点に着目し, 「多い」の習得のために, 名詞を修飾する場合に形容詞のみでの連体修飾ではなく, 節での名詞修飾の練習の機会を設けることを提案する。(16b) の二重主語文の主題を (16c) のように, 被修飾名詞にとる構造にする発想である。

- (16) a. *多い映画館
- b. この街は映画館が多い
- c. 映画館が多い街

加えて, 被修飾名詞が数量を表す名詞の場合, 実例 (17) のように比較の対象を明示することで, 基準が明らかになり, 連体用法が可能になるとしている。

「多い/少ない」の連体用法が安定する条件として「Y が Z+名詞」の形をとることを述べたが, 被修飾名詞が数量を表す名詞の場合, すなわち「数量 (Y) が多い/少ない」ことが明らかな場合には, 以下のように「何より」多い/少ないのかという基準を補うことで連体用法が安定する場合がある。

(度会, 2015, p. 171)

- (17) a. 県警は大型連休中、昨年より多い十五万人の人出を予想している。
- b. 9月以降は平年より少ない降水量となった。
- c. 幼児は、大人より多い量の水分補給が必要です。

(度会, 2015, p. 171 下線は原文ママ)

しかし, 比較の対象を明示することで, なぜ何の数量が多いことが明らかになるのだろうか。被修飾名詞を特定する情報がないのにもかかわらず, 数量の寡多の判断を容易にする要因は何か。(18) にみるように, 度会 (2015) で提示される用例は「人出」を修飾する「十五万人」を除けば, 叙述用法に展開できる。また, (17) では「多い」と「少ない」が二重主語構文の構造をとることができず, 被修飾名詞の属性を表さないために名詞修飾を用いることができないという考察に矛盾する。すなわち, (19) の

ように、二重主語文をもとに生産される「多い」の名詞修飾文とは異なる構造を有している。この点を明らかにすべく、(17a)のような比較構文における「多い」の構造を明らかにし、考察を改める必要がある。

- (18) a. 昨年より人出が多い
 b. 平年より降水量が少ない
 c. 大人より量が多い水分補給が必要です。
- (19) a. この映画館は客席が多い
 b. 客席が多い映画館
 c. *多い客席
 d. 今年の大連休は人出が多い
 e. 人出が多い大連休
 f. *多い人出

そして度会（2015）では、『なかま2』、『げんき』、『ようこそ』、『みんなの日本語』、『Situational Functional Japanese』、『Japanese: The Spoken Language』、『Japanese for Busy People』の7冊の教材のうち、「多い」の連体用法についての記述が『Japanese: The Spoken Language』にしか見られなかったことを踏まえ、実際の教育現場で導入、練習されることの必要性に言及している。なお、『Japanese: The Spoken Language』における説明は次のとおりである。“Ooi and sukunai are adjectival that occur as predicates following the item to which they specifically refer” (Jordan 1987) 基本的に名詞修飾語として使われない点、代わりに「多くの」などが使われる点の記述がなく不十分だとしている。指導法の提案として、大きく2点挙げている。叙述用法のみでの使用と「多くの」への言い換えである。

実際に学習者にこの誤用は多くみられるのだろうか。次章以降で比較構文における「多い」の用いられ方と学習者の実際の誤用を観察する。

3. 被修飾名詞の性質と形容詞が要求する項の観点

先行研究では、「多い」で被修飾名詞の事物の数量や回数多寡を表すには叙述用法が用いられ、連体用法で表すには、名詞形である「多く」や形容動詞の「たくさん」が用いられることを山田（2004）、西尾（1987⁶）、森田（1989）の記述からみた。その理由は、森山（2000）によれば、「多い」が存在の仕方を表す形容詞であり、被修飾名詞の属性や性質を表さないためであるとしている。一方で、度会（2015）があげる比較の対象が明示される例が、前述の説明に矛盾することをみた。本章ではこの構造を分析し、連体用法をとらない特殊な形容詞である「多い」の分析を発展させる。

3.1 BCCWJを用いた実例の観察

比較構文において「多い」の連体修飾に主格の特定が要求されない。この点が、「多い」が被修飾名詞の属性を表さないため連体用法で用いられない」という先行研究の

分析と矛盾しており比較構文の例を提示した度会（2015）でも明確に分析されていない。なぜこの場合、修飾節で主格の補完がなくとも容認されるのか。

度会（2015）は、被修飾名詞が数量を表す名詞のとき、比較対象の明示によって基準が明らかになり、連体用法が安定するとしていた。本研究では、より詳細に議論するべく、比較構文で用いられる「多い」の連体用法の被修飾名詞を実際の用例を通して観察し、その特性を報告する。その後、比較構文においてなぜ連体用法が可能になるのかを論じる。

実例は、『現代日本語書き言葉近郊コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) (以下, BCCWJ)』を用いて採集した。BCCWJは書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などからサンプルが抽出されており、日本語使用の縮図になるようデザインされている。本コーパスから「[名詞] + [書字形「より」] + [形容詞 / 語彙素「多い」 / 連体形] + [名詞]」、すなわち比較表現「より」を前置する「多い」の連体用法を、短単位検索し抽出した。その用例を(20)から(30)にとりあげ、抽出元の出典を付記する。下線は筆者による。

まず、比較表現の前に、ガ格による主格の明示があり名詞修飾節を作る例をみる。

- (20) 高脂血症は、血液中のコレステロールや中性脂肪が通常より多い状態で、動脈硬化の重大な危険因子の一つである。

(工藤陽孝, 2002, 走れキヨタカ)

「通常より多い状態」が単独で使われた場合、何が多いのかは文脈中で判断する必要があるが、節そのものは非文法的とまでは言えないのではないだろうか。この例の被修飾名詞は「状態」であり、数量を表す名詞ではない。

次に、比較表現の前にガ格による主格の明示がなく、不自然でない用例をみる。

- (21) これら観測結果によると、つくば及び鹿児島で十一月に平年より多いオゾン量が観測されたが、年を通じては平年並みか平年より少ない

(1996, 環境白書)

- (22) 最近、韓国市場で取引されている柑橘の相場は、当初の予想より多い七十万トンに達する

(李・柳, 2004, コミュニティ・ビジネスモデルの診断)

- (23) これはある程度までは真ですが、潜在需要より多い発行数の場合は、なかなか完売しないか、あるいは売れ残ることになります。

(2008, Yahoo!ブログ)

- (24) キャリアを切り開いていきたい、あるいは将来ぜひ独立や起業をしたいという学生より多い数字である。

(高橋俊介, 2004, スローキャリア)

- (25) 今月下旬と見込んでおり、来年5月十日まで営業予定。今季は例年より多い十二万二千人の来場者を見込んでいる。

(2008, Yahoo!ブログ)

(21) から (25) は被修飾名詞が数量を表す名詞である。

(26) そしてその知性と野心により、女性はその夫より多い収入を得、いい仕事についていたとしても (略)

(ベルスキー・ケリー (安次嶺佳子訳), 1995, 子供をもつと夫婦に何が起こるか)

(27) 映画は話す言葉が本当に多く見える。通常の映画より多いナレーションもナレーションだが, (略)

(2008, Yahoo!ブログ)

(28) 一億何千万人という日本の全人口より多い名簿をそろえていると言われていま

す。

(秋田仁志, 2002, 市民がつくる 21 世紀の日本国憲法)

(29) 人間は自分の両手より多い水はすくえないってさ

(矢作俊彦, 2004, ロング・グッドバイ)

(30) 「三十三週のと看、生理より多い出血があつて、切迫早産で三十六週まで入院しちゃつたんです。

(実著者不明, 2002, マタニティ)

(26) から (30) の被修飾名詞は数量を表すものではない。しかし、主格の補完なしに自然な解釈が可能である。以上の例から、被修飾名詞が数量を表す名詞でなくとも、主格の補完を要さないことをみてきた。このことから、被修飾名詞が数量名詞でなくとも比較構文で連体用法が成り立つ。

2.2 比較表現の構造

前節の実例の観察では、[(A は) B より・・・] の形をとる実例みたが、このほかに日本語の比較表現は英語の比較級のような形態がなく、二者間の要素の相対関係が比較表現によって対照される二者有差比較, 同程度比較, 最上級がある(森山, 2004)。その表現形式は [B より (A は) もっと・・・], [B は A ほど・・・ない], また [B に比べて A は・・・] [A は一番/最も・・・] など様々である。

ここまでの議論を整理すると、比較の対象が「より」などで明示される比較表現があると「多い」の連体用法が可能になる。さらに、被修飾名詞になるものが、二重主語文と比較表現があり主格のない文で異なっている。すなわち、(31) のように、二重主語文では、何について述べているかが被修飾名詞になっているのに対して、比較表現では主格の位置に現れていたものが被修飾名詞の位置に現れている。何について述べているかが比較表現で表される対象によって類推される。ここで着目すべき点は、比較表現が二重主語文におけるガ格のように「多い」を節にする役割を担っている点である。(32a) から (32b) の類推が可能であろう。この点で、比較構文は二重主語構文と同様に節を構成している。

- (31) a. あの患者は出血が多い。
b. 出血が多い患者だ。
- (32) a. あの患者より多い出血に見舞われている。
b. この患者は多い出血に見舞われている。
c. *あの患者より多い出血だ。
- (33) a. 京都は寺が多い。
b. 京都は寺が多い街だ。
c. 大阪より多い寺を見られます。

しかし、ここで議論を終えるのは早計である。比較構文が二重主語文と大きく異なる点は主題と主格が入れ違っていることではない。主題が被修飾語として述語にならないために、動詞がなければ(32c)のように文として成立しない。比較表現と動詞の両方の存在が必要であることがみてとれる。

以上、比較構文における被修飾名詞の特性を実例の観察から再検討し、一見「多い」の連体用法を成立させているかに見える比較表現と続く動詞文の構造を分析した。比較構文では、従来論じられてきた二重主語文とは異なる構造によって「多い」の修飾節が形作られている。

4. 実際の学習者の誤用の観察から

最後に、日本語学習者コーパス『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese As a Second Language) (以下, I-JAS)』を用い、実際に学習者がした誤用を観察する。I-JASは、12の異なる母語の1050名に及ぶ学習者の日本語使用データが、7種の12タスク(発話タスクと作文タスクがそれぞれ6ずつ)によって収集されている。加えて、同様のタスクを用いた日本語母語話者の言語使用データも15名文採集されている(迫田ほか, 2016)。なお、このコーパスでは学習者の日本語熟達度もJ-CATとSPOTの2種類の客観テストによってレベルを判定できるよう統制されている。さらに学習者の詳細な背景情報もあわせてみることができる。以下、学習者の使用を例示する際は、学習者の母語とJ-CATの総合得点及びSPOTの得点を付記する。なお、例文中の〈 〉内は調査者の発話であり、下線は筆者による。

I-JASで[語彙素「多い」]+[名詞]を検索した結果、44件の使用例が抽出された。日本語母語話者によるものは調査者と協力者の使用がどちらも含め20件あり、その中に比較構文を用いた「多い」の修飾節はみられず、いずれもガ格によって修飾節を構成していた。なお、この検索方法では「多い」の連体用法や「ため」や「そう」などの形式名詞も抽出されており、20件の数にはこれらを11件分含んでいる。

さて、学習者の24件の例では、(34)から(37)のような8件の正しい使用と(38)から(42)のような「多い」の連体用法による7件の誤用があった。また、(43)及び(44)のような使用も抽出されたが、「大きい」と言いたかったとも考えられるため、ここでは連体用法の誤用として数えない。加えて(45)のような意味の面での誤用も

あった。なお、この検索方法では「多い」の連用用法や「ため」や「そう」などの形式名詞も抽出されており、24件の数にはこれらを6件分含んでいる。

- (34) その生クリームが多いケーキ
(ドイツ語, J-CAT225, SPOT84)
- (35) で一、一番一、宿題が多い授業です
(タイ語, J-CAT275, SPOT77)
- (36) 仕事が終わったら、帰宅しゆっくり家族と一緒にご飯を食べる時間が長い時代でした。
(タイ語, J-CAT281, SPOT79)
- (37) 家族が多い家で料理を作るのは時間がかかりますが、(略)
(ロシア語, J-CAT 174, SPOT61)
- (38) えっと一滝やたくさん多い町です
(ベトナム語, J-CAT268, SPOT68)
- (39) あれなんですけど、お多い人はそれ、それをおいしいと言います
(韓国語, J-CAT183, SPOT65)
- (40) えと一、多い人が〈うん〉いるで、行っても〈うん〉ってに行っても〈うん〉たいていえっと一たのしたのしー楽しむこと (略)
(英語, J-CAT194, SPOT70)
- (41) でも一うん一多い人が上海がいいな一と思います
(中国語, J-CAT229, SPOT67)
- (42) これは多い現代人の問題である。
(ロシア語, J-CAT244, SPOT76)
- (43) え一、おお、多い声で一、マリーと、言いました
(マリスペイン語, J-CAT182, SPOT59)
- (44) 例えば、イタリアである多き運動は『スロー・フード』のために戦います。この運動は日本にもある
(ドイツ語, J-CAT225, SPOT65)
- (45) 歴史が多い町です。
(ドイツ語, J-CAT207, SPOT68)

(38) は主格を補おうとする名詞を発話しており、かつ「たくさん」を使用する気配がうかがえる。これらの実例から、日本語学習者の多くは「多い」の連体用法を多用しているというより、人が多いことをいうとき、「多い」の連体用法を多用している。度会(2015)の現場での「多い」の用法の導入と練習は、特に「人」に重点を置いてなされるべきである。

5. 考察

本稿では、比較構文での「多い」の被修飾名詞の特性の再検討し、その構造を分析

した。また、先行研究でも論じられてきた二重主語文とは異なる構造によって「多い」の修飾節が形作られていると分析した。これは、森山（2000）による「多い」が存在の仕方を表す形容詞であり、被修飾名詞の属性を表さないために連体用法が不自然となり、節を形成することで修飾部を作ることが可能になるという分析に整合性のある説明である。

加えて、学習者コーパス I-JAS の実例から、度会（2015）指導法の提案に、「人」を被修飾名詞とする「多い」の連体用法に特に入念な説明と練習が必要であることを提案した。

最後に、「多い」の対義語である「少ない」について述べ、今後研究の展望としたい。森田（1989）でみたように、「少ない」は「多い」の対義語であり、その用法も連体用法を用いることができず似通っている。一方、酒入ほか（1991）では「少ないお金」や「少ない給料」、「少ない時間」などが容認されることがあげ、その根拠をこれらは「社会通念として少ないとみなされる給料」や「24時間という限りある中での少ない時間」といった、その基準に共通認識にあり絶対的な数の少なさを表す「わずか」と同じように用いられているためと考えている。しかし、この理由づけは、森山（2000）の被修飾名詞の属性を表さないために連体用法が不自然となるという説明と矛盾する。今後より一貫した記述説明に向けて、これらの事例の分析が必要である。

注

¹ 「戦争ガ終ワッタ時（寺村, 1993, p. 139）」を副詞節、「彼ガ勝ツ可能性（寺村, 1993, p. 139）」を英語に合わせて同格節としたり、「ハズ」「ツモリ」など「ダ」を伴って文末文節を形成する形式名詞などを例としてとりあげている。

² 日本語の形容詞は動詞と同じように活用があり、叙述用法では英語で be 動詞が必要になるのと違い、そのまま述語になることができる。また、名詞修飾も動詞の修飾用法と区別する理由はないように思われるが、形容詞の名詞修飾が時制を反映しているかどうかは疑わしく、形容詞と動詞の名詞修飾を別々に扱っている（寺村, 1993, p. 152）。

³ 橋本進吉（1887-1945）が1930年に編んだ『新文典別記』など、国文法教科書の教授法参考書をもとにした、文語文法を中心に整理した文法体系である。

⁴ 形容詞の否定形は「多く ない」のように、連用形に否定の形容詞「ない」が付くと考えられる。このことは、「多く は ない」のように、間にハを入れられる点で、「ない」が独立の形式を有していると言えるとしている。また、丁寧なときは「多くないです」だけでなく、「多くありません」もいえる点もその根拠としている。加えて、「多く+ある+た」→「多かった」のように性質を述べる際に存在のし方によって表すことにも言及している。「寒うございます」のような丁寧な形や、山口方言の「寒くあります」や京都方言の「寒（う）おす」でも同様であるとしている。

⁵ この方法で検索した場合、「多い」が修飾する名詞として「はず」や「ため」、「こと」、「とき」、「場合」、「気がする」なども同じ形式として検出される。しかし、これらは「多い」の意味を受ける被修飾名詞ではなく、名詞的にふるまう文法的機能を持った要素であるため、分析の対象としない。

参考文献

酒入郁子・桜木紀子・中村寿子・佐藤由起子・中村貴美子・山田あき子（1991）. 「Question

- 75 「多い友達が遊びに来ました」は間違っていますか。』『外国人が日本語教師によくする100の質問』 231-233. バベル・プレス
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016). 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』 6 (3). pp.93-110.
- 寺村秀夫 (1993). 「名詞修飾部の比較」『寺村秀夫論文集 II 一言語学・日本語教育編一』 139-184. 東京：くろしお
- 西尾寅弥 (1987⁶). 「[69]程度 おびただし>おおい , たくさんの」『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』 329-332. 東京：秀英出版
- ブルームフィールド (三宅鴻・日野資純訳) (1962) 『言語』 東京：大修館書店
- 森田良行 (1989). 『基礎日本語辞典』 東京：角川書店
- 森山卓郎 (2000). 「[3] 品詞を考える (2) 用言 (動詞・形容詞・形容動詞) と活用」『ここからはじまる日本語文法』 35-46. 東京：ひつじ書房
- 森山卓郎 (2004). 「日本語における比較の形式」『月刊言語』 33 (10). 32-39.
- 山田敏弘 (2004). 「連用修飾・連体修飾」『国語教師が知っておきたい日本語文法』 74-85. 東京：くろしお出版
- 度会尚子 (2008). 「「多い/少ない」の誤用について：名詞修飾を中心とした考察」『Princeton Japanese Pedagogy Forum』 15. 166-177.
- Bolinger, D. 1967. Adjectives in English. *Lingua* 18.

資料体

- BCCWJ = 現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言2.2.0) 国立国語研究所
- I-JAS = 多言語母語の日本語学習者横断コーパス (中納言 2.2.1) 国立国語研究所